

学習者用英和中辞典に於ける音声表記への一提案 — 英音と米音の統一的表記を目指して —

長瀬 慶来

英米に於ける学習者用英語辞典の発展に伴い、本邦の学習者用英和中辞典も目覚ましい進歩を遂げてきた。本稿では、その学習者用英和中辞典における理想的音声表記について、特に英音と米音を統一的に表記するという観点から論じた。また、従来の分節音（単語の個々の音）の表記のみならず、プロソディー（句強勢、文強勢）についても、いわゆる成句、口語表現等を中心として表記する試みを提案する。

キーワード： 学習者用英語辞典、発音表記、句強勢、文強勢

序

英米に於ける学習者用英語辞典のここ十年間の発展には、めざましいものがある。以下の4冊が最近出版されたものの中で、代表的な学習者用英語辞典である。

Longman Dictionary of Contemporary English 3rd edition (1995, 2001) 以下 LDOCE3NE

Oxford Advanced Learner's Dictionary, 6th edition, (2000) 以下 OALD6

Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners, 3rd edition, (2001). 以下 COBUILD3

Macmillan English Dictionary, 2002. 以下 MED

これらの英米に於ける学習用英語辞典の発展に伴い、学習用英和辞典も大きく変貌を遂げてきた。中型の英和辞典に限ってみても、『新グローバル英和辞典』第2版 2001（以下『グローバル』と略記）、『ジーニアス英和辞典』第3版 2001（以下『ジーニアス』と略記、『ルミナス英和辞典』2001（以下『ルミナス』と略記）と3冊とも同じ 2001 年出版である。

発音表記に関する重要な出来事は、上記の学習用英語・英和辞典の出版と前後して、J. C. Wells 編の *Longman Pronunciation Dictionary*, (1990, new edition 2000)（以下 LPD と略記）が出版されたことである。LPD は内外の英語辞典の発音表記に多くの影響を与えた。

本稿では以下、学習者用英和中辞典に求められる音声表記への提案を、特に英音と米音の統一的表記という観点から行う。

1. 学習者用英和中辞典の発音表記

1.1. 音声表記 vs 音素表記

通常、学習用英和中辞典においては、発音辞典と同様、発音は国際音声字母 (IPA) を用いて表記される。表記は、発音表記と言われるけれども、実際に音声（異音）表記（かつては [] が用いられていたため、音声表記 (phonetic transcription) との誤解があったが、最近では [] が使われることはなくなった）が採用さ

れることは希で、基本的に音素表記 (phonemic transcription) であり、見出し語の直後に / / の中に入れて示される。上記の英語辞典：LDOCE3NE, OALD6, COBUILD3, MED の全て、および上記の日本の学習用英和中辞典『グローバル』『ジーニアス』『ルミナス』の全てで / / に入れた音素表記が採用されており、[] に入れた表記は、スーパー・アンカー等、現在では少数派となっている。

1.2. 表記のモデル

世界中には様々の英語のアクセントが存在する。論理的には、モデルとして記述されるアクセントには、本家英国の多様な変種から、北米の様々な変種、豪州、ニュージーランド、南アフリカ等の南半球の英語そしてインド、シンガポール等のアジアの英語に至る様々な可能性がある。そのような英語の地域的および階層的アクセントの中で、モデルとして選択すべきアクセントに優劣があるわけでは決していない。モデルとして選択される理由には、政治的、経済的および地理的等の、様々な理由が考えられるが、言語学的には、イギリスの英語とアメリカの英語が選ばれる理由は、単に文献、辞書等に於いて詳細に記述されており、信頼できる典拠も多いという1点のみある。

1.3. 英米差

英米の発音が異なるときは、単縦線 (|) を用いて / 米音 | 英音 / のように示される。米音とは、アメリカ合衆国中西部で広範に話されている「一般米語」(General American) と呼ばれているタイプの発音を言う。これはまた、3大ネットワークで標準的に用いられる発音であるため、ネットワーク英語 (Network English) と呼ばれることがある。英音とは、英国イングランド地方南部の教養ある人々によって用いられている「容認発音」(Received Pronunciation) と呼ばれているタイプの発音を言う。BBC 放送で標準的に用いられる発音であるため、BBC 英語とも呼ばれる。

1.4. 典拠

発音表記は、英米に於ける信頼できる最新のデータに基づき行うのが望ましいが、その際、長期的展望に立ち、学習モデルとして相応しい音声表記を採用する、等の教育的配慮が必要とされる。

代表的な典拠とすべき発音辞典は次の通りである。

J. C. Wells (1990, new edition 2000), *Longman Pronunciation Dictionary*.

Daniel Jones, Peter Roach and James Hartman (1997), *English Pronouncing Dictionary*.

また、上掲の OALD 等の学習者用英語辞典も適宜参照すべきである。

米音に関する発音辞典は、Kenyon, J. S. and Knot, T. A. (1958), *A Pronouncing Dictionary of American English*. は資料として古い、以後米語の発音辞典は出版されていない。そのため、最新の情報を得るには、Webster 系の最新の辞書および *The American Heritage Dictionary of the English Language* (2000) は極めて有用である。

2. 母音と子音

日本語の「あいうえお」の音のように、声帯振動を伴う有声音で、息が声道内で妨げや閉鎖等を受けないで発声される音を母音と言う。これに対して、息が声道内で妨げや閉鎖等を受けて発声される音を子音という。

2.1. 母音

母音を表記する際注意すべき点を、以下に簡単にまとめる。(発音記号表参照)

2.1.1. 長短 vs 音質

日本語の「イ」と「イー」および「ウ」と「ウー」は長短の違いであるが、英語の bit vs beat および pull vs pool の対立は、音質の違いである。/i:/ および /u:/ は緊張母音 (tense vowel) と呼ばれ、舌はその位置が高く緊張しており、唇も緊張 (/u:/ の場合丸めて突き出す) しているため、それぞれ日本語のイー、ウーと似て聞こえる。それに対し、/ɪ/ および /ʊ/ は、弛緩母音 (lax vowel) と呼ばれ、舌はその位置も下がり緩んだ調音となる。そのため、/ɪ/ は英語の liver が日本語でレバーとして借用されているように、日本語のイとエの中間に聞こえる。同様に、/ʊ/ は英語の hook が日本語でフックとして借用されているように、日本語のウとオの中間に聞こえる。

そのため学習用中辞典では、bit には /ɪ/, beat には /i:/, また同様に pull には /ʊ/, pool には /u:/ という様に、音質の違いであることを示すため、異なる記号を用いるのが教育上望ましい。

「イ」と「イー」 /ɪ/, /i:/

「ウ」と「ウー」 /ʊ/, /u:/

2.1.2. 二重母音と連母音

日本語の「ア」「エ」「オ」に聞こえる音には次のような

ものがある。

「ア」と「アイ」, 「アウ」 /aɪ/ /aʊ/

「エ」と「エイ」 /e/, /ei/

「オ」と「オー」, 「オウ」, 「オイ」 /ou/, /oi/

日本語では「アイ」といった場合、「ア」と「イ」の連続 (連母音) であるが、英語で /aɪ/ と言った場合は、/a/ から /ɪ/ の方向への移動があるだけで、必ずしも /ɪ/ の調音位置まで到達するわけではない。それゆえ二重母音と呼ばれる。これらの二重母音の到達目標も上述のように /ɪ/ と /ʊ/ であることに注意が必要である。

(/ɪər/ ear, /ʊər, ɔ:r/ poor, 等の第一要素も同様。)

2.1.3. 様々な「ア」

日本語では「ア」に聞こえる領域に、英語では次のように 5 種類程度の音が存在する。

それぞれの音に関して、発音・聞き取り両面での詳細な解説が必要であろう。

/æ/ cat, /æ | ɑ(:)/ half, /ɑ:/ palm,

/ɑ(:) | ɔ/ hot, /ʌ/ cut, /ə:r/ bird,

/ə:r | ʌr/ courage, /ə/ above, /ər/ doctor

2.1.4. 母音の英米差

a) R 音化母音 (rhotic vowel)

綴り字で母音のあとに /r/ がある時、米音でその母音を発音する際、そり舌で /r/ の音色を持つ母音となる。その音を R 音化母音と言う。本提案では、R 音化母音はその母音のあとに斜体の /r/ をつけて表し、英米統一表記とする。すなわち、米音ではこの斜体の /r/ は先行する母音と合体し R 音化母音となることを表し、英音では斜体の /r/ は省略されることを表す。

例: bird /bɜ:rd/ は、米音では /bɜ:rd/ = /bɜ:d/ (カギ付きシュワ /ə/ は本提案では採用しない)、英音では /bɜ:d/ であることを統一的に表す。(/ɪər/ ear, /eər/ air, /ɑ:r/ art, /ɔ:r/ door, /ʊər, ɔ:r/ poor 等も同様。) この表記は、R 音化母音を持つ /r/ の音色が、その表記の線形性のため、後半部分から始まるような誤解を与えるという批判がしばしばなされるが、これはあくまで音素表示であることを考慮に入れると、/ə/ + /r/ → /ər/ という音韻規則を学習者に説明すれば解決する。前述の OALD, LDOCE, MED が (母音の記号は異なるが) この表記を採用している。(COBUILD は斜体字の代わりに上付きの /r/ を採用している。) また、国内の英語検定教科書が殆どこの方式を採用していることを併せて考えると、学習用英和中辞典の表記としては当面この方式がベストであろう。

b) 米音 /ou/, 英音 /əʊ/ について

/ou/ は、厳密には英音では /əʊ/ となるが、上記の英語辞典の中で /ou | əʊ/ の表記を採用しているものは、OALD 6, LDOCE の二冊で、COBUILD も MED も英米ともに /ou/ で表記している。

上記の学習用英和中辞典でこの表記を採用しているものは皆無である。国内で出版されている中でこの表記を

採用しているものは、おそらく研究社『新英和大辞典』が唯一であろう。

この曖昧母音 (schwa /ə/) は特に注意が必要である。曖昧母音 (schwa /ə/) は、様々な音がその強勢を失って弱化した時の音である。(下記弱母音の項参照) しながら、初心者はこの音を「あ」で代用しがちである。学習者がこの記号を誤解して「あう」というような間違った発音をするのを避けるため、表記としては教育的には /ou/ のみで十分であろう。

ただし、英音ではこの二重母音は、曖昧母音 (Schwa /ə/) の位置から始まるという注意が必要である。

英音 /əu/ の表記を使用しないことと 短母音 /o/ が存在しないことから、ヴァリエーションを示す方法として /ou/ /əu/ の第2要素を斜体で示す (/ou/ /əu/) ことはしないで、/ə, ou/ と併記する方式が解りやすい。

例: obey /oubéi, ə- | ə-, ou-/

c) 英米で異なる母音を用いるもの。

次の5つのグループの語では、英米で異なる母音がいられるので注意する必要がある。

- i) /æ | a:/ half, ask, fast
- ii) /a(:) | ɔ/ hot, pot, odd
- iii) /ə:r | ʌr/ courage, hurry, worry
- iv) /ɔ: | ɒ/ dog, soft,
- v) /a(:) | ɔ:/ water

注意: 米音の ii) hot, v) water 等に見られる /a/ の音は、伝統的に短母音として記述されることが多かったが、実際には長母音 /a:/ と同じと考えて、/a:/ と表記する辞典も増えている (LPD, OALD 等)。本提案では、長音記号を () に入れて (:) で示す。(尚、/ / で挟まれた IPA 表記の中で () を用いるのはこれが唯一の例外。その他の省略可能な要素はすべて斜体で示す。)

2.1.5. 弱化および強形と弱形

a) 弱形と強形

自然な発話では、**内容語** (名詞、動詞、形容詞、副詞、等) は通常強勢を受けて強く発音されるが、**機能語** (冠詞、代名詞、助動詞、前置詞、接続詞、等) は、通常強勢を受けない場合と焦点・対照等のため強勢を受ける場合とで異なる発音形を用いることがある。強勢を受けない場合の音形を弱形、強勢を受ける場合の音形を強形と呼ぶ。

本提案では、弱形と強形の表記は、弱形、強形の順で次のように表記する。

例: have / 弱 həv, v; 強 hæv /

b) 弱母音

強勢を受けない弱音節には弱母音 /ə, ɪ, u/ が現れる。それぞれ強勢がある時の母音の弱化した音と考えて良い。但し、/ə/ の場合は、弱い「ア」に近い、いわゆる「曖昧母音」の音に聞こえる場合と、元の強勢を受けたときの綴り字が表す音 (基底母音) に近い音価を保持してい

ることがあるので注意が必要である。また、本提案では、/米 jə | 英 ju/, /米 jə | 英 ju / は、便宜上それぞれ、/ju/, /ju/ で統一する。同様に、名詞複数形および動詞三人称単数現在の語尾 /米 -əz | 英 -ɪz/ は共に、/ɪz/ で統一する。更に、動詞過去形、過去分詞形の語尾 /米 -əd | 英 -ɪd/ も /ɪd/ で統一する。

2.2. 子音

子音で注意すべき点のみを以下に簡単にまとめる。(発音記号表参照)

2.2.1. 注意すべき子音

a) /t/ の弾音化

/t/ は語頭および語尾では、top, eat 等に見られるように、一般的に氣息音 (h) を伴った /t/[tʰ] が用いられるが、母音間に挟まれ前の音節に強勢がある時、米音では有聲化され弾音 [ɾ] となる。弾音とは舌先で歯茎をはじいて出す有聲音で、日本語のラ行頭子音に近い。最近では、多くの学習用中辞典で、何らかの方式でこのことを表示するようになった。下に示すように、/t/ の下に小さな補助記号 [ɾ] (有聲化を表す voiced の頭文字 v) を付けて示す (/t/ water, better) 方式が、LPD, OALD 等で採用されている、もっとも一般的な方法である。英米の違いを示すためには、better/bétər | bēta/ とするのが望ましいであろうが、本提案ではスペースの節約のため、better/bétər/ をもって英米両音を表すものとする。その場合、末尾の斜体字の /r/ と同様、/t/ の下の補助記号 [ɾ] がある時は米音を表し、無い時は英音を表す。

b) 鼻音化した弾音 /nt/ = [ɾ̃]

米音では、twenty, winter のような語では、nt の連鎖は合体して、鼻音化された弾音 [ɾ̃] となる。その結果、あたかも /t/ の音は聞こえないで、弾いた /n/ だけが聞こえ、トウェニー、或いはウィナーに近く聞こえることがある。(winter と winner が完全な同音異義語になる話し手もいる。)

鼻弾音 [ɾ̃] という新しい記号の導入は、教育的に見て妥当ではないと思われる。学習用中辞典では、/nt/ で表記し、説明を加えるので十分であろう。(或いはもう一步踏み込んで /n̥/ とし示すのも可能性の一つであろう)。

例: twenty /twɛntɪ/, winter /wɪntər/

c) 有聲と無聲の /w/

綴り字 wh で示された音は、米音では (減少傾向にはあるが)、依然として無聲の /w/ で発音されることが多く、英音では通例 (LPD によると 7~8 割) 有聲の /w/ で発音される。

例えば、white /maɪt | waɪt/。但し、/w/ の記号は馴染みが薄いので、学習者用中辞典では、慣例に従い、無聲の /w/ を便宜上 /hw/ で示す。従って white /hwait | waɪt/ のようになる。本提案では、英音米音を統一的に示すため、/h/ を斜体にして次のように示す。

例: /hwaɪt/

2.2.2. 子音の挿入および脱落

a) 脱落

綴り字にあっても自然に発音すると過半数の英米人が脱落させる子音, たとえば attempt の /p/ 脱落等は斜体で示す。

例: attempt /ə'tempt/

b) 挿入

suggest, often 等の, 綴り字にあっても以前は発音しなかったが, 最近 (英または米で) 半数を超えて発音されるようになった /g/ および /t/ 等の挿入子音についてはともに斜体で示した。

例: suggest /səgdʒést/
often /ɔ:(t)ftən/

いわゆる嵌入閉子音 (鼻音 + ^{ptk} 摩擦音) の /p/, /t/, /k/ については, strength 等の /k/ 以外は学習者用中辞典では表記しない。しかし, この環境では, 原則として必ず嵌入閉子音は存在すると考えていいので, 注意しておく必要がある。

例: tense /ten's/
hamster /hæm'pster/
(strength 等の /k/ については他との整合性を保つため, 学習者用中辞典では斜体字表記する。)
例: strength/streŋkθ/

3. 優先順位 (preference)

本提案では, 複数の発音がある場合には, 最近の研究に基づき, 左から順に好まれる順序で発音を表記する。英米で優先順位が異なるときは, /b,a | a,b/ のような表記を採用する。

例: falcon /fælkən, fɔ:l- | fɔ:l-, fæl-/

4. 英米での追加的発音 (+英, +米)

英米の発音が共通で, さらに英/米で追加すべき別の発音がある場合は, +英, +米として追記する。即ち, /共通, +米, +英/, /共通, +米/, /共通, +英/ とする。

例: envelope /'envəloʊp, +米 ɑ:n-, +英 ɔn-/

5. 省略要素

5.1. 省略可能要素は, 原則として斜体 (イタリック体) で示す。

但し, 上述の (:) の () は例外。

例: which/hwɪtʃ | wɪtʃ/ は⇒/hwɪtʃ/ で統一
/tu: | tju:/ 等は⇒/tju:/ で統一

5.2. 音節の省略

原則として綴り字の分綴法に従い, 前後の省略された音節をハイフンで示す。

例: -ert, -mju-

5.3. 単語の省略

分離複合語等で, 見出し語と同じ単語を省略する際はスワングダッシュ (〜) を用いて省略し, その上に直上式で強勢を表記する。

例: tea の分離複合語の中で: 〜 bāg

5.4. 複合成語

合成語等で発音表記が不要と思われる場合は, 綴り字の上に直上式で強勢のみを示す。

例: cārry • ōut cārry-ōver

5.5. 派生語

派生語は見出し語と共通部分は省略する。

例: energetic /'enərdʒɛtɪk/, -cally /-ɪkəli/
但し, 強勢移動のあるものは省略しない。

例: telemetry /tələ'mɛtri/, tēlemetric

6. 強勢 (ストレス)

6.1. 強勢の段階

学習者用中辞典では, 強勢段階については, 第一強勢 /ˈ/ および第二強勢 /ˌ/ および無強勢の三段階表記とする。

例えば, 名詞句で核強勢規則が適用される white hóuse (2+1) と複合語強勢規則が適用される White Hòuse (1+3) の2種類を比較すると, 確かに強勢の差は存在するが, 全体のリズムとして見ると, 英語のリズムは基本的に強弱の交代と考えた方がわかりやすい。

white hóuse	White Hòuse
2 + 1	1 + 3 (本提案では2で表記)

そこで学習者用中辞典では, 強勢レベルの2と3の違いは無視し, 第一強勢 /ˈ/ および第二強勢 /ˌ/ そして無強勢の三段階を採用する。

6.2. 強勢移動 <ストレス>

Japanese /dʒæpə'nɪz/ のような語においては, student のような語頭の音節に第一強勢があるような語が後続する場合, 強勢の衝突が起き, 後続する語の第一強勢が句全体の核となるため, 強勢移動 [ストレス・シフト] (あるいは, /-ni:z/ の上の第一強勢の消滅) が起こる。

例: Japanese student /dʒæpə'nɪ:z stju:dənt/

学習者用中辞典では, このような強勢移動を, Japanese /dʒæpə'nɪ:z/ <ストレス> のように, <ストレス> の記号を用いて示すのが望ましい。また複合語及び成句等では強勢移動したものを表記する。

6.3. 複合語強勢, 句強勢, 文強勢

6.3.1. 音韻句 (音調句) と強勢パターン

発話は, 一つあるいは複数の音韻句からなるが, 一つの音韻句には原則として第一強勢 (音調核) は1つだけ生じる。従って, 単一の音韻句内では, /ˈ/ 第一強勢 + 第一強勢のパターンは存在しない。その結果, 学習

者用中辞典で表記すべき二つの要素からなる複合語, 成句等における強勢パターンは, 以下の4種類のみということになる。

- ① 2+1 (/ ˘ ˘ /)
- ˘N+˘N Christmas pudding
 ˘Adj+˘N white house, gr̄een b̄ean
 ˘N+prep+˘N a bird in the h̄ands, a pīece of c̄ake
 ˘N+conj+˘N c̄akes and āle
 ˘Vi+˘Adv ḡet ūp
 ˘Vt+˘O 但し, O が代名詞の時は, ˘Vt+pronoun
 ˘Vt+˘Adv c̄arry ōut
 ˘Vt...+˘Adv ˘Vt+˘Adv... c̄arry... ōut
 Object の位置に語がある時,
 ˘Vt+˘Adv+˘Object ˘Vt+˘Object+˘Adv

- ② 1+2 (/ ˘ ˘ /)
- ˘N+˘N Christmas tr̄ee
 ˘Adj+˘N White H̄ouse, gr̄een b̄elt

- ③ 1+無強勢 (/ ˘ /)
- ˘Vi+prep l̄ook at...
 前置詞の目的語が明示されている時
 c̄ome of āge 2+0+1

- ④ 無強勢+1 (/ ˘ /)
- be+˘Adj is ȳoung
 prep+N in J̄apan
 但し, prep の前に Adv がある時
 ˘Adv+prep+˘N ūp in the āir 2+0+1

略語:

N=名詞, Adj=形容詞, prep=前置詞, conj=接続詞, Vi=自動詞, Vt=他動詞, Adv=副詞, O=目的語, pronoun=代名詞

6.4. 複合語・句強勢における英米差

英米の強勢パターンが異なる場合は, 米パターンを見出し語の直上に, 英パターンをその後に / / に入れて示す。たとえば N+N の例では m̄obile h̄ome / 英 ˘ ˘ ˘ /。

すなわち, アメリカでは MOBILE home だが, イギリスでは mobile HOME であることを示す。

また, 従来の強勢パターンが共通でさらに別の強勢パターンがある時は, /, ˘ ˘ ˘ / で示す。

6.5. V+Adv の強勢型と目的語

a) 後ろに person, oneself 等が明示されていない場合は全て ˘V+˘Adv と表記する。

b) 後ろに person, oneself 等が明示されている時は, (Adv.により例外はあるが) 原則として, ˘V+˘ADV+p̄erson と表記する。

3 + 2 + 1

このような例では, 動詞部分の第三強勢は, 第二強勢として表記する。従って, 例えば, 目的語が明示されて

いないときは

kick ōut ~, kick ~ ōut

となるが, 目的語が明示されているときは

kick ōut a p̄erson

となる。

6.6. () 内の要素の強勢

括弧に入った要素がある時は, 上述の目的語の場合と同様, その要素があるものとして強勢パターンを表記する。但し, その括弧に入った要素が第一強勢を持つ場合, その要素がない時に, 第一強勢の場所がわからなくなってしまう。こうしたことをさけるため, その左に来る義務的要素と括弧に入った要素の2カ所に第一強勢を付与している。第一強勢を持つ括弧に入った要素がある場合は, 左側の第一強勢は自動的に第二強勢に弱められるものとする。

例えば, Pacific (Standard) time とすることにより, Pacific Standard time および Pacific time の両方を表す。

注意: 文・句強勢については, 発話をいくつかの音韻句に分けるかによってその記述は大きく異なる。たとえば, He was born with a silver spoon in his mouth. は一つの音韻句として発話すれば He was b̄orn with a silver sp̄oon in his m̄outh. となるが, 複数の音韻句に分割することも可能である。学習者用中辞典では, できるだけ自然な発話になるように音韻句を選択するのが望ましい。

参考文献

1. *Cambridge Dictionary of American English*, 2000, ed. by Sidney I. Landau, Cambridge University Press.
2. *A Concise Pronouncing Dictionary of British and American English*, 1972, ed. by J. Windsor Lewis, Oxford University Press.
3. *English Pronouncing Dictionary*, 1997 ed. by Daniel Jones 15th edition, ed. by Peter Roach and James Hartman, Cambridge University Press.
4. *Longman Advanced American Dictionary*, 2000 (pronunciation editors: Rebecca Dauer and Dinah Jackson)
5. *Longman Pronunciation Dictionary*, 2000, ed. by J. C. Wells, New Edition, Pearson Educational Limited.
6. *Oxford Advanced Learners Dictionary*, 2000 ed. by A. S. Hornby sixth edition, ed. by Sally Wehmeier, (phonetics editor: Michael Ashby), Oxford University Press.
7. *Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English*, 2001, ed. by Upton, C., Kretzschmar, W.A. and Konopka, R., Oxford University Press.
8. *Oxford Idiom Dictionary for Learners of English*,

2001 (phonetics editor: Michael Ashby) Oxford University Press.

9. *Oxford Phrasal Verbs Dictionary for Learners of English*, 2001 (Phonetics editor: Michael Ashby) Oxford University Press.
10. *A Pronouncing Dictionary of American English*, 1953, ed. by Kenyon, J.S. and Knott, T.A.G.&C. Merriam & Co.

発音記号表

[母 音]

記号	例	記号	例
/i:/	eat, people, meet	/ɑ(:) ɔ/	lot, hot, cod
/ɪ/	bit, sit, kit	/ʊ/	pull, book, could
/e/	bed, said, friend	/u:/	school, pool, move, moon
/æ/	cat, hat, map	/ei/	cake, take, day
/æ ɑ(:)/	half, ask, fast	/ai/	eye, life, die
/ɑ:/	palm, psalm, balm	/ɔɪ/	boy, oil, voice
/ɑ(:) ɔ/	hot, pot, odd	/aʊ/	house, cow, doubt
/ʌ/	cut, come, nut	/oʊ/	go, road, open
/ə:r/	bird, pearl, world	/ɪər/	ear, beer, here
/e:r ʌr/	courage, hurry, worry	/eər/	air, there, pair
/ə/	above, rabbit, album	/ɑ:r/	heart, art, star
/ər/	doctor, cover, vermilion	/ɔ:r/	morning, warm, door
/ɔ:/	law, tall	/ʊər, ɔ:r/	poor, tour, your
/ɔ: ɔ/	dog, soft, log, cough		

[子 音]

記号	例	記号	例
/p/	pen, apple, up	/s/	sea, person, miss
/b/	book, rabbit, job	/z/	zoo, music, rise
/m/	man, common, come	/ʃ/	ship, special, dish
/t/	top, letter, eat	/ʒ/	vision, pleasure
/t̪/	water, better	/h/	hot, ahead
/d/	dog, London, sad	/l/	lion, melon, bell
/n/	name, tennis, man	/r/	rain, very, marry
/k/	cake, skin, kick	/w/	wet, twice
/g/	good, finger, bag	/hw/	white, whale
/ŋ/	ink, sing	/j/	young, beauty
/tʃ/	chair, kitchen, catch		
/dʒ/	June, danger, edge		
/f/	five, coffee, enough		
/v/	very, river, have		
/θ/	three, ethics, bath		
/ð/	this, other, bathe		

外来語音, 方言音, 特殊音

/x/	Bach
/ç/	Fichte
/ʔ/	uh-oh

強勢記号

/ ˈ / 第一強勢

/ ˌ / 第二強勢

◀ ストレス ▶ 強勢移動

- 注) 1. | (単縦線) の左側は米音, 右側は英音を表す。
 2. 斜体および (:) は省略可能を表す。
 3. 母音のあとの /r/ は米音では直前の母音を R 音化することを示し, 英音では省略されることを示す。
 4. /t̪/ は米音では弾音になることを示し, 英音ではこの補助記号 / ˈ / がないものと考え, 弾音化しないことを示す。

Abstract

A Proposal for the Phonetic Transcription in the English-Japanese Dictionary for Advanced Learners —Toward a Unified Transcription of British and American English—

NAGASE Yoshiki

With the rapid development of monolingual advanced learners' dictionaries of the English language, the English-Japanese dictionaries for advanced learners in Japan have also made great progress. This paper tries to describe the ideal phonetic transcription for the English-Japanese dictionaries for advanced learners, particularly from the viewpoint of a unified transcription of British and American English. A proposal for the prosodic transcription of compound/phrasal stress and sentence stress patterns as well as the segmental transcription is also suggested.

Key words: advanced learners' dictionaries of the English language, phonetic transcription, compound/phrasal stress, sentence stress

Department of English
Yamanashi Medical University
1110 Shimokato, Tamaho, Yamanashi 409-3898
E-mail: ynagase@res.yamanashi-med.ac.jp

